

良忍上人と鞍馬寺

浜田 全真

良忍と鞍馬寺との関係を載せた史料の初見は、建長六年成立の『古今著聞集』である。これによれば良忍が融通念仏を勧進の時に、青衣の僧に化した鞍馬寺の毘沙門天が現われ、名帳にその名を記し融通念仏を守護することを誓つたと記されている。この話は建長八年の自序をもつ『広疑瑞決集』にもみられるところから、既に鎌倉時代には一般化していたことがわかる。しかしながら良忍と鞍馬寺との関係は、平安時代の往生伝にはみられないところで、全くの説話にすぎないとするむきもある。又、西口順子氏の「院政期における別所浄土教の考察——良忍上人伝をめぐって——」によれば、鞍馬寺と大原の別所聖との間に密接な関係があることがわかり、私は鞍馬寺の焼亡に伴う造営再建の勧進活動としてこの問題を考察したい。

昭和三十四年に発掘された紀州粉河寺裏の産土神社経塚出土の如法経筒銘には、良忍が天治二年に清原信俊の発願に協力して鞍馬の奥の芹生別所で如法経書写を行なつたことを記している。良忍の如法経修行は既に『後拾遺往生伝』（巻下）にみえるが、この経筒銘は良忍が如法経勧進を行なつていたことを示すものである。そしてこの願主の信俊は五年前の保安元年にも四口の大法師に如法経を書写させて鞍馬寺に奉納している。この経筒銘には鞍馬寺の重怡や

大原の賢俊の名が記されているので、鞍馬の如法経聖と大原の念仏聖の間に協力関係があつたことをおもわしめる。『本朝新修往生伝』の清原信俊伝によれば、彼は十口の浄侶に書写させた如法経を所々の名山靈寺に納めているというから、この頃には鞍馬寺が如法経の靈場とみなされていたことがわかる。そして当時、鞍馬と大原の中間に江文の別所があり毘沙門天を本尊とする江文寺には多くの隠遁聖が修練苦行していたのである。

ところで鞍馬寺は大治元年十二月十九日に焼失しているが、翌大治二年新造の吉祥天女像胎内般若心経并吉祥天十二名号とを合写した経巻の奥書に重怡と快賢の名が記されている。このうち快賢は『後拾遺往生伝』や『本朝新修往生伝』によれば、江文寺に住していた念仏を修していたのである。このように江文に住していた快賢の参加がみられることは、数ヶ月前の鞍馬寺の焼亡に伴う造営再建に如法経による勧進活動が始められたことを暗示せしめるものがある。そもそも中世に於て、造寺造塔や法会を維持する為には、勧進によらねば出来なかつたことは、東大寺再建に俊乗坊重源を勧進職に任命し、重源の下に集まつた多くの勧進聖の活動によつたことに顕著にみられる。このような例は高野山や善光寺等の靈場寺院にもみられることから、当時既に靈場寺院として著名であつた鞍馬寺が、焼亡に伴う再建造営に勧進活動を要したことは想像するに難くない。このことを裏付けるものとして、暦仁元年の焼亡の際、十年後の宝治二年に再興供養が勧進によつてなされたことが『百鍊抄』に記されている。そして正嘉二年には現存の銅燈籠が奉納されているが、それには「勧進沙弥西蓮」の名がみえる。更に鞍馬寺は長祿二年にも焼失しているが、『大乘院寺社雜事記』文明十五年七月三日の条

には鞍馬寺の奉伽帳を持つた聖の存在をのせている。このような勧進には芸能も行なわれた様で、長祿二年の焼亡より六年後の寛正五年に興行された紀河原の申樂は鞍馬寺の勧進聖によつて行なわれたものであつた。

以上のことより鞍馬寺には焼亡のたびに勧進活動を窺えることから、最初の焼亡に鞍馬をとりまく大原・江文・芹生の聖達によつて勧進活動がなされたことはほぼ間違いないと思われる。『融通念仏縁起』に記された良忍の勧進開始が天治元年で、鞍馬參籠が天治二年であることは鞍馬寺焼亡の年号とあわせ考察すべきであらう。この様な勧進に融通念仏が最も適していた所より、鞍馬の毘沙門天信仰が融通念仏の勧進を通して結合されてくるのである。

既に述べた様に江文寺の本尊は毘沙門天であつたが、『古今著聞集』には良忍と同様に声明に秀でていた寂源が大原勝林院において常行三昧を行じていた時、毘沙門天が守護したことをのせている。

更に『法然上人行状画図』（巻十四）には顯真が勝林院で不断念仏を始めた時、毘沙門天が列に立つたことを記している。顯真の念仏が融通念仏に近いものと考えられるところより、良忍以後大原において鞍馬寺の毘沙門天が融通念仏を守護するという信仰が形成されていたことがわかるのである。故に「融通念仏すすむる聖」であつた一遍が弘安六年に尾張の甚目寺に詣でた時、毘沙門天からむかえられその像が一遍の方へ歩み出たという奇瑞に接するもの、融通念仏の守護神としての毘沙門天信仰を示すものと解せられる。これらのことから鞍馬寺の毘沙門天信仰は良忍以後融通念仏の勧進と結んで発展していったと思われる。

ところで鞍馬の毘沙門天信仰が融通念仏の勧進を通して庶民と結

びつく要素として毘沙門天の福神的性格を指摘することができる。

本来毘沙門天は、吉藏の『法華義疏』等に記された如く北方の守護神であつたことより、鞍馬寺の毘沙門天は京都の北方を鎮護するものであつたが、次第に庶民のもつ福の神信仰と結合して福神化するのである。既に『金光明最勝王經』の「四天王護國品」に毘沙門天の福神的性格がみられるが、『宇治拾遺物語』には伊良縁の世恒が毘沙門天の下文によつて福を得る話がのせられている。そして室町時代には「御伽草子」の「毘沙門の本地」や狂言「連歌毘沙門」に語られている様に、中世には福の神としての毘沙門天信仰が広く一般化していたといえる。鞍馬寺も『蔭涼軒日録』によれば、長享三年の寅の日に貴賤争つて参詣しその数二万ばかりであつたと記しているが、『都名所図会』には正月の初寅に毘沙門天より十種の福を授けてもらおうと鞍馬寺に参詣する多くの庶民の姿をのせている。そしてこの時に百足の小判をいただと金が倍になると信じられているので、庶民にとつて毘沙門天は最も関心の深い物質的欲望を充足するものであつた。このような鞍馬の福神信仰は鞍馬寺がとくに勧進に当籤の方法をとつたためにおこつたものとおもわれる。

以上述べてきた如く、良忍と鞍馬寺の問題は良忍をはじめとする融通念仏の勧進と関係深いものであつた。即ち鞍馬寺の焼亡に伴う造営再建のための勧進活動を通して融通念仏の守護神としての性格を形成していったのである。そして融通念仏が勧進を通して庶民と結びつき得た要素の一つに、庶民にとつて毘沙門天が既に当時福神として信仰されていたことを指摘できるのである。

参考文献 1 五来重教授『高野聖』2 橋川正氏『鞍馬寺史』